特別支援学級部会

県研究主題
一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育課程の編成と教育活動の展開の工夫・改善

提案１　　提案者　藤野　ゆか（県央地区）

＜研究主題＞
児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導内容、指導方法、指導体制、評価の工夫・改善 ～コミュニケーションについて～

１　提案内容

Ａ児の不適切な行動の要因から教育的ニーズをとらえ、コミュニケーションの素地を養うことをめざして、段階を踏んで指導に取り組んだ。実践を通して、周囲の人との関わりが増え、呼びかけに応えたり要求等を伝えたりするようになり、不適切な行動も減少した。

（１）　実態把握と目標設定

身辺処理を簡単な介助で行い、パズルやブロック遊びが得意で集中して取り組むことができる一方、周囲の人との関わりをもとうとせず、表情が乏しい等、気持ちを表現することが難しく、衝動的な行動が目立っていた。

不適切な行動の要因をとらえ、コミュニケーションの力をつけて落ち着いた生活を送ることをめざして、右のようなコミュニケーションの素地を養う指導に取り組んだ。

・人と関わることに慣れる。
・周囲を意識した行動を取ろうとする。
・自分の気持ちを適切に表現しようとする。

（２）　指導の実践

①　個別学習のなかで

刺激の少ない空間で視覚教材を活用して、個別学習を行った。表出言語や身振りサイン、模倣行動などが確認できたが、必要な場で言葉やサインを使うことがほとんどなく、不適切な行動から集団で活動することが難しいことが多かった。

②　少人数でのやりとりや遊びのなかで

人とのやりとりの楽しさを味わえるように、朝の会に手遊び歌を取り入れ、自立活動の時間にみんなで遊ぶ活動を設定して、右のように段階を追って取り組んだ。

①相手に注目する。
②一対一のやりとりを楽しむ。
③少人数で遊ぶことに慣れる。

手遊び歌に大変興味をもち、笑顔で人に注目したり好きな歌や身振りを催促したりするなど人にかかわろうとする場面が増え、離席が減った。また、感覚を表す言葉が増えるとともに、表情の変化が見られ、感情が分化してきている様子が伺えた。

③　教科学習のなかで

他児と同じ場で取り組めるようになり、少人数での学習を設定した。習得した力を生かし、伝えることの面白さや満足感を経験できるように、「伝言ゲーム」「ジェスチャーゲーム」「カルタ取り」等を行った。動作や言語の模倣が増え、順番や簡単なルールを守り、人に要求する身振りや言葉が増えて使うようになってきた。

（3）　成果と課題

実践の結果、右のような成果が見られ、小グループでの活動が可能になり、生活の範囲が広がり始めている。

まだわずかな環境の変化や刺激にも反応し、サインや言葉の数は少なく場に適した伝え方も限られている。学級での安定した関係の中で、言葉やサインでのやりとりを多く経験できるようにして、さらにコミュニケーションの力を育てていきたい。

・人と関わることに慣れる。
→ 友だちとの遊びに参加できるようになった。
・周囲を意識した行動をとろうとする。
→ 呼びかけに応えるようになった。「待って」「後で」の指示で、待てるようになった。
・自分の気持ちを適切に表現しようとする。
→ 要求を伝えることが増えた。思いが伝わりやすくなり、不適切な行動が減った。

2　協議内容

「コミュニケーションに関する指導の工夫」を協議の柱に設定し、研究協議を行った。

（1）　質疑

衝動的な行動が生じたときの教師の声かけ、個別学習の時の刺激調整、スケジュールの理解、アセスメント、などについて質問があった。

（2）　参考にしたい点

担任との一対一の関係から段階を追って安定した関係や場を作り、広げていくことで周囲の人との関わりができてきた。また、介助員の言葉から不適切な行動の要因に気づき指導につなげるなどチームとして取り組んだことや、好きなこと得意なことを指導内容や活動に生かしたことなどが大きな成果につながっている。小集団を生かした活動を楽しむことによって、周囲の人を意識し、関わりや模倣行動が見られるようになった。それが、発語やルールに沿った行動にもつながっており、今後のコミュニケーションの指導にも生かせると考えられる。

（3）　コミュニケーションの指導の充実に向けて

コミュニケーションの手段として何がふさわしいかを見極めることが大切である。場面に応じて、文字・絵カードやサインを含めて試して選んでいく。また、それらを言葉に結びつけていくことで、自分の気持ちを表現できるようになっていく。選択の場面を作ることや要求言語を教えることも有効である。模倣の力を生かして、発語ややりとりを増やしていけるのではないか。学習活動として設定されたゲームや遊びを通して育てられる力がある。手遊び歌や数え歌を楽しんだり、ごっこ遊びを生かしたりしてコミュニケーションを広げていけるとよい。

3　まとめ

障害の特性をとらえて指導することが大切である。感情表出がわかりにくいことから、行動の問題が出てきた。行動には背景があることをとらえて分析していくことが必要で、アセスメントも必要に応じて行っていく。

本実践では、安心して落ち着いた生活を送り、学習できる環境作りに取り組んだことがよかった。その中で、適度な刺激を作り、やりとりの中でルールを教えるなど指導につなげていったことが効果的であった。

情報の伝達にはやりとりの成立が必要であり、使える手段（記号化するもの）を見つけることが大切である。A児の次の課題は双方向なやりとりができるようになることであろう。また、関わり手（教師）の受信行動の改善も意識していきたい。子どもの発信を丁寧に受けとめ、受

け取ったことを子ども自身にわかりやすい形で返すことで、子どもはコミュニケーションの楽しさを味わい、発信意欲を高めていく。

提案２　　提案者　　尾嶋　啓子（相模原地区）

＜研究主題＞
児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた効果的な指導内容、指導方法、指導体制の工夫・改善
～グループ指導を活用して～

１　提案内容

情緒障害通級指導教室（サポートルーム）には２年生から６年生まで、37名の児童が、自校をはじめ市内全域から通級している。情緒の発達にアンバランスがあり、対人関係や社会性、行動面等に課題があって、学級集団での活動の様々な場面で苦戦している児童たちである。ここでは、Ａ児の教育的ニーズを把握し、グループ指導を活用しながら、個に応じた指導内容や指導方法等を工夫してきた取り組みについて報告、提案する。

（１）　実践の概要

・個別指導計画の作成・・保護者、指導主事、カウンセラーからの情報を基に作成。
・教育的ニーズに応じた指導・・グループ指導を活用した指導。
・保護者との情報交換・・連絡帳の活用、教育相談の実施。
・学級担任との情報交換・・連絡帳の活用。

（２）　指導の実践

①　話す

身近な出来事をニュースとして発表。独特の言い回しを、相手を意識し分かりやすい表現で話すよう指導。わからない言葉は国語辞典で調べる。

②　ゲーム

少人数でのゲームを通して、ゲームのルールやみんなで決めた約束事に沿って活動する、勝敗にこだわりすぎない、自分の苦手なこと等がある場合には交渉して変更をお願いするなど、場に応じた振る舞い方、対処の方法を身につけさせる。

③　運動

バランスよく動くことを目標に、同じ動きを正確に繰り返すことやテンポに合わせること、体の部位を意識してゆっくり動くこと等を指導。日直が一番に並び、モデルを見せる、定位置に体育座りをして話を聞いたり、順番を待つ等のルールについても指導。

④　学習

プリント学習への抵抗感を減らし、諦めないで取り組む態度や、わからない時は質問して教えてもらう方法を指導。他児より早く終わった時の時間調整のしかたを身につけさせる。

（３）　成果と課題

他児の思うようにできずに暴言を吐く姿や人への不適切な関わり方を見て、そうした行動をとってしまう気持ちに共感し、自分の生活を振り返ったり、自分の特性を理解して自分なりの対処方法について気づきはじめたりするなど成長が見られた。

保護者や学級担任は連絡帳のやりとりやＡ児の変容から、頑張っていることを理解し認め、クラスメートもＡ児の苦手さを理解するなど、Ａ児を取り巻く環境にも変化が見られるよう

になった。

多様な教材を活用して、やりとりを大切にしながらグループ指導を活用したことで、児童の課題が整理でき、保護者、担任と連携し一人ひとりの特性に合った生活を実現させる方向を見いだすことができた。

2　協議内容

「一人ひとりの特性に応じた指導の工夫」を協議の柱に設定し、研究協議を行った。

（1）　参考にしたい点

担当する教師が指導目標や対応のしかた等情報を共有して、役割分担のもと指導にあたっているが、チームで指導することが大切である。勝ち負けの理解や受け止め方の違いから子ども同士で行き違いになることがあるが、じゃんけんの負けを納得させる場面やグループの編成のしかたに工夫を感じた。

（2）　一人ひとりの特性に応じた指導の充実に向けて

児童の実態を的確に把握し、課題を整理することが必要。グループ指導を行う場合でも、一人ひとりの目標が違う。その点を教師が押さえておくことが大切。通級で学んだことが、家庭や学級で活用できることが大事。学級担任や保護者と連携を十分とって、共に歩調をそろえて指導できると良い。

3　まとめ

サポートルームでの指導が、児童の在籍する学級での生活や学習を支えるものであることを念頭に置いて、視点がずれないようにしていく必要がある。

児童の状況によって、個別指導からはじめてグループでの指導へ展開していく場合もあるし、グループ指導をしていく中で課題が明らかになって個別に指導を行う場合もあり、柔軟に取り組んでいく必要があるが、そのためには個別指導計画が実践の基となる。入級にあたり、教育委員会、在籍校、カウンセラーからの情報や教育面談で保護者の考えを聞き、実際に児童の様子を見た上で、教育的ニーズを捉えてそれを基に実態把握をしながら個別指導計画を作っていくシステムができていることが大切である。

本実践では連絡帳を使用し、一人ひとりについての重点目標を決めて集団の中の個別化を図っているところが良い。十分な担当者同士の打ち合わせがあるからこその実践であろう。